

開催地名：島根県松江市	
開催日時	令和元年 10 月 16 日（水） 10：00 ～ 11：30
開催場所	松江市立島根小学校
語り部	菅野 祥一郎 （岩手県陸前高田市）
参加者	島根小 5・6 年生、島根中学生徒、教職員等 約 180 名
開催経緯	松江市では、近年日本各地で災害が発生していることで、災害への意識が高まっている。今回依頼する島根小学校、中学校では合同で津波訓練を毎年実施しているが、東日本大震災発災から年月が経過し、若年層への災害伝承が課題となっている。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は、岩手県の南端に位置し、すぐ隣は宮城県である。東日本大震災では津波の被害を受け、多くの命が失われた。リアス海岸は狭い海岸のため、波の高さが増し、被害を大きくしたのだ。大きな津波は毎年来るものではない。忘れたところに突然やってくる。自分だけは大丈夫、ここまではこないだろう等々、安全を過信しては行けない。自然を侮ってはいけない。 （２）絶対に子どもたちを助けるという信念 地震が発生したときに所用で校外にいた私は、急いで学校に戻ろうとしたが、途中の橋が通行止めになり、想定外の時間がかかってしまった。戻った時、子どもたちや近隣の住民は校庭に整列していたが、既に津波は川をさかのぼり始めており、時間の猶予はなかった。私は、丸太の階段を使い、隣の山の上にある青いフェンスまで 6 年生から順番に登るように指示した。低学年から登れば渋滞してしまい、時間がかかってしまうためである。 つい先ほどまで校門付近にいた数十人の人たちは、私たちのそばから消えてしまった。校舎に逃げた人たちは、屋上の貯水槽の上に登れた一人の方を除き、流してしまった。子どもたちが助かった理由は、そして 住民の生死を分けたものは何なのか。それは、「誰よりも早く逃げることを決断したこと」に尽きると思う。「元気に登校してきた子供は元気に帰さなければならない」、それが教師の思いである。 （３）避難所では 私たちの学校の子どもたちは全員が助かった。そして、何日か経ってどんどん家族の迎えが来た。正確には迎えに来ても帰る家がないのだから「無事を確認に来た」と言った方がいいのかもしれない。食べ物は小さなおにぎり 1 個。近くの冷凍工場から流れ出た冷凍秋刀魚を拾い上げ、焼いて食べた。不平不満を言うものは一人もいなかった。

	ある子には、最後まで誰も迎えに来ることはなかった。その子がどんな思いで、家の人が現れるのをずっと待っていたか、皆さん想像がつくだろうか。本当につらかったと思う。 また、私が直接見たわけではないが、瓦礫の中からようやく息子さんを発見した家族が、その横にある中身を全部抜かれた財布を見て、どう思われたか。日本人は立派だなんて言われているが、遺体にむち打ち、傷口に塩を塗り込む、そんな人間がいることは、本当に悲しい。 (4) 皆さんへのお願い 皆さんに、以前教師だったという立場からお願いしたいことがある。それは、「命を大事にしてください」ということである。まずは自分の命を、そして隣の人の命を。必死で逃げても命が尽きてしまった彼女。彼女だけでなく、たくさんの若い命が一瞬にして奪われた。どんなに怖かっただろう。想像しても想像しても、その恐ろしさ、苦しさは私にはわからない。こんな恐ろしい災害が起こるなんて夢にも思わなかったから。 しかし、人生には思いもよらないことが起こる。だから、今、この時を大切に。生きていくことの幸せをかみしめてほしいと思う。そして、誰の命も大切に。する人になってもらいたい。陸前高田の人は、大切な人をたくさん亡くした。しかし、厳しい環境の中で、精一杯明るく前を向いて歩む人がたくさんいる。皆さんは自分の家がある。家族がいる。自分の学校がある。学校には広い校庭がある。友達がいる。当たり前のことだけでも素晴らしいことである。だから、家族や友達を大事にして先生方のお話をしっかり聞いて、一生懸命勉強してほしい。
開催地より	東日本大震災を経験された方の生の声を聞くことができ、津波の恐ろしさ、そして命の大切さを強く感じる事ができた。体験された内容は現実感があり、誰よりも早く決断する知恵と勇気をしっかりつけていきたいと思った。貴重なお話をいただいた語り部に、本当に感謝したい。